

## 教員適性の発見と実践的指導力養成に関する研究

### —教育実習による教員適性観の変化—

井上 弥・石原英雄・高橋 超・石井眞治

科学技術の飛躍的進歩や情報化,あるいは急速に進行する国際化,さらには高学歴化などの社会の急激な変動は,個人の価値観や生活様式,ライフスタイルなどに大きな影響を及ぼしてきている。こうした変化にともなって,教育課程や教育職員免許法などの改訂に代表されるように,学校教育はその質や量において大きな転換期を迎えており,教師に求められる資質や技能,適性も一段と多様化し,高度化してきている。このような社会的背景から,教員養成に関する研究は,ますますその重要性を高めてきているが,とりわけ,これからの時代にふさわしい教師の教授技能や適性を明らかにし,それらを体系的に修得させるカリキュラム開発に関する研究は,教員養成系大学・学部においては急務の課題といえよう。

すでにわが国においては,これまで大学生や現職教師を対象として初等・中等教育に携わる教師に求められる教授技能や適性を実証的に明らかにし,こうした技能や適性が教育実習においていかに修得されるのかを検討した研究が数多く行なわれてきている(生田,1987;生田・深沢・榊田・田中,1985;愛知教育大学教育方法改善研究グループ,1988;松田・今榮,1989;岡屋・若山・湯浅・小松,1989;鈴木・佐藤・今榮・岩井,1977)。生田(1987)は,「指導案を作成する力」,「授業を実施する力」,「自分の授業を自己評価する力」,「他人の授業を観察・分析する力」などの教授技能を測定する尺度を考案して大学生と教育実習の指導を担当した教師に実施している。その結果,技能によっては3年次よりも4年次においてより厳しい自己評価のなされるものがあると同時に,学年が上がるに連れて伸びの顕著な技能とそうでない技能の存在することが明らかにされて

いる。ここで取り上げられた教授技能の一般性には多少の問題が残るものの,教員養成系学部学生の教授技能がいかに形成されていくかを実証的に明らかにしたという点では示唆に富むものである。

また,愛知教育大学教育方法改善研究グループ(1988),松田・今榮(1989)は,望ましい教師像,教師のパーソナリティ,教師の指導性,生徒指導のあり方などに関して様々な研究で記述されているものを手がかりとして,教員適性を測定する質問紙を作成し,大学生と現職教師に実施した。結果は因子分析され,「着実な指導力」,「校務遂行能力」,「教育に対する熱意」,「知的好奇心と専門的知識」,「子どもに対する愛情と配慮」の5つの主要因子が抽出されている。また,こうした因子は学生と教師にかなり共通するものであることが明らかにされている。これらの研究は,調査に用いられた質問項目は今後さらに吟味することが必要と思われるが,教員適性を多面的に明らかにしたという点では,今後の教員適性に関する研究の一つの方向づけを与えた研究といえよう。

ところで,教員養成における重要なカリキュラムの一つが教育実習であることはいうまでもない。教育実習によって教師に必要な教授技能や適性を効果的に修得させるためには,実習校での指導はもとより,大学における事前・事後指導も極めて重要である。これまで,教育実習によっていかなる技能や適性が修得されるのかということに関して,かなりの心理学的研究が行なわれてきている(例えば,生田ら,1985;生田・深沢,1986;井上・石井,1989;倉島,1985;田畑,1973)。こうした研究は,実際の教育実習形態や期間などに違いがあることも勿論であるが,教育実習の効果を評定する側面が研究者によってまちまちである

ことから、教育実習によってどんな技能や適性がどれくらい修得されるのかを一般化するものとはなっていない。

そこで、本研究では、鈴木ら（1977）の研究で明らかにされた教授技能と、松田ら（1989）が明らかにした教員適性因子の一般性を検討し、合わせて、こうした技能や適性が教育実習経験によっていかに変容するかを明らかにすることを目的とした。

## 方 法

**調査対象者：**広島大学学校教育学部 に在学し、教育実地研究を受講した3年生86名（男子32名、女子54名）、及び4年生29名（男子7名、女子22名）、合計105名を調査の対象者とした。したがって4年生29名は昨年以前に教育実地研究をすでに

受講しており、今回の教育実地研究には参加していない。

**調査時期：**3年生を対象として行なわれる1週間にわたる教育実地研究の開始3日前及び終了6日後の2回にわたって、3年生、4年生を対象として一斉に調査を行なった。この教育実地研究は3年生にとっては初めての教育実習であり、観察実習を中心としたものである。

**調査項目：**調査項目は、(1)教育実習への適応に関する項目、9項目、(2)鈴木ら（1977）の研究で用いられた項目を一部修正した教授技能に関する項目、23項目、(3)松田ら（1988）の研究で用いられた項目を修正した教員適性に関する項目、43項目、及び(4)教職に対する態度の項目、2項目、合計77項目であった。教育実習への適応に関する項目と教職に対する態度の項目については当てはまるか否かを5段階で、また教授技能に関する項

表1 修得したい教授技能の因子分析

項目	因 子					h <sup>2</sup>
	I	II	III	IV	V	
指導案の書き方	.80					.66
教材研究の仕方	.74					.72
授業分析の仕方	.73					.67
教科の専門的知識	.59			.41		.56
板書の仕方	.58					.64
説明の仕方・話し方・問のとり方		.83				.81
発問の仕方		.82				.76
子どものとらえ方		.74				.64
ほめ方・しかり方・しつけ方		.65				.62
児童会・生徒会の指導の仕方			.79			.68
学級会の運営の仕方			.68			.62
PTA活動についての知識			.67			.56
特別教育活動指導の仕方			.61			.55
教育評価の仕方	.43		.45			.47
教育理念				.76		.69
学習指導の心理学的知識				.64		.64
問題をもつ子どもの指導の仕方				.63		.58
教師の基本的な心構え				.63		.59
学校組織・校務分掌のあらまし					.70	.54
教育機器の使い方			.41		.63	.68
教材・教具の正しい使い方	.42				.58	.66
教師としての礼儀作法					.57	.42
給食の指導の仕方					.48	.57

表2 教員資質の因子分析

項目	因子				h <sup>2</sup>
	I	II	III	IV	
話が流暢（りゅうちょう）である	.68				.56
事務処理能力がある	.64				.50
きびきびと仕事を片づける	.64				.62
厳しい	.63				.44
ワープロ・パソコンを利用できる	.62				.39
よい趣味をもっている	.55		.46		.58
清潔できちんとしている	.55				.49
読みやすい字がかける	.48				.40
順応性がある	.47				.41
いつも冷静でいられる	.47				.44
えこひいきがない		.74			.60
必要以上に口やかましくいわない		.67			.62
偏見をもっていない		.66	.43		.64
自分の感情をおさえることができる	.45	.59			.56
どのような子どもでも差別しない		.58			.61
けじめがある		.57			.58
わかりやすく教える		.56		.44	.62
他人にわかりやすく話をする	.47	.55			.60
人柄に裏表がない		.52			.45
子どもに愛情をもっている		.50	.46		.58
子どもを見る目がしっかりしている		.44		.42	.50
創造性・独創性がある		.43			.42
知的好奇心が強い			.67		.58
何事にも熱心である			.55	.47	.57
思慮深い			.54		.46
健康で体力がある			.53		.34
勤勉である			.52		.49
子どもの親の気持ちを理解する			.51		.41
教えることに使命感をもっている			.45		.48
いろんなことに興味をもっている			.43		.31
信念をもった生き方をする			.42		.23
信頼できる				.65	.53
教えることに意欲をもっている				.62	.52
指導力がある				.61	.53
組織を管理する能力がある	.45			.53	.49
注意深い仕事ができる				.52	.49
思いやりがある				.52	.46
子どもの心理についての理解が深い				.49	.38
いつも授業に工夫を加える				.42	.42
快活でユーモアがある	.41			.42	.50
かっこうがよく、魅力的である					.29
同僚と共同して仕事を進める					.36
専門についての深い知識をもっている					.44

目については修得度を5段階で、さらに教員適性に関する項目については重要度を5段階で評定するように求めた。

調査手続：教育実習前に行なった調査では、教育実習の成果の予想や期待として回答を求め、また実習後の調査では、実際の経験や到達度として回答を求めた。

## 結果及び考察

### 1. 教授技能及び教員適性の因子構造

以下の分析では、教授技能及び教員適性の因子構造を検討するため、今回教育実地研究に参加した3年生86名と4年生29名を合わせた115名分のデータを用いた。

(1) 教授技能の因子：教育実習前後の修得したい程度の評定を基に、教授技能に関する23項目について主因子法により因子分析を行なった。固有値1.0以上の5因子についてバリマックス回転したものを表1に示した。この表1からもわかるように、第1因子には、“指導案の書き方”、“教材研究の仕方”、“授業分析の仕方”といった項目が高い負荷を示していることから、この因子は「教材・授業研究技能」の因子と考えられる。次に、第2因子には、“説明の仕方・話し方・問のとり方”、“発問の仕方”、“子どもとらえ方”といった項目が高い負荷を示していることから、「説明技能」の因子と考えられる。また、第3因子には、“児童会・生徒会の指導の仕方”、“学級会の運営の仕方”、“PTA活動についての知識”といった項目が高い負荷を示しており、「課外活動運営技能」の因子と考えられる。さらに、第4因子には、“教育理念”、“学習指導の心理学的知識”、“問題をもつ子どもの指導の仕方”といった項目が高い負荷を示していることから、「教育・心理の基礎知識」の因子と考えられる。最後に、第5因子には、“学校組織・校務分掌のあらまし”、“教師としての礼儀作法”といった項目が高い負荷を示しており、「学校組織運営技能」の因子と考えられる。これらの結果は、鈴木ら(1977)の研究で得られた因子と類似したものであった。

(2) 教員適性の因子：教育実習前後の評定を基に、教員適性に関する43項目について主因子法に

より因子分析を行なった。固有値1.5以上の4因子についてバリマックス回転したものを表2に示した。この表2からわかるように、第1因子には、“話が流暢である”、“事務処理能力がある”、“きびきびと仕事を片づける”、“ワープロ・パソコンを利用できる”といった項目が高い負荷を示していることから、この因子は「事務処理能力」の因子と考えられる。次に、第2因子には、“えこひいきがない”、“偏見をもっていない”、“自分の感情を抑えることができる”、“どのような子でも差別しない”といった項目が高い負荷を示していることから、この因子は「生徒への配慮」の因子と考えられる。さらに、第3因子には、“知的好奇心が強い”、“何事にも熱心である”、“勤勉である”、“教えることに使命感をもっている”といった項目が高い負荷を示していることから、この因子は「教育への熱意」の因子と考えられる。最後に、第4因子には、“信頼できる”、“教えることに意欲をもっている”、“指導力がある”、“組織を管理する能力がある”といった項目が高い負荷を示していることから、この因子は「実践的指導力」の因子と考えられる。これらの因子は、教員養成大学の学生を対象とした松田ら(1988)の研究と類似したものであった。このことから、学生のもつ教員適性観には共通の次元があると考えられよう。本研究では、教授技能、教員適性とも従来の研究と同様の因子が得られており、このような因子が一般的なものであることが示された。

### 2. 各側面の時期変化

以下の分析では、教育実習による各側面の変化を検討するために、今回教育実地研究に参加した3年生86名のデータを用いた。

(1) 実習への適応：教育実習に対する適応に関する9項目それぞれについて、時期ごとの平均得点を示したものが表3である。この表3を基に、各項目ごとに時期による差を検定した結果、“小学校での研究・学習は楽しい ( $t(85)=5.62, p<.01$ )”、“先生たちに気軽に話しかけられない ( $t(85)=3.50, p<.01$ )”、“先生と呼ばれることに抵抗を感じる ( $t(85)=2.83, p<.01$ )”、“他の実習生とうまくつき合えない ( $t(85)=2.05, p<.05$ )”、“指導案を書くのが難しい ( $t(85)=4.73,$

p<.01)”, “授業の予習ができない (t(85)=2.30, p<.05)”, “実習を続けるための自分の能力に自信がない (t(85)=4.24, p<.01)” の7項目で有意な差がみられた。表3からもわかるように、実習前の予想と比べ, “小学校での研究・学習は楽しく”, “先生たちに気軽に話しかけられ”, “先生と呼ばれることに抵抗を感じなくなり”, “他の実習生とうまくつき合え”, “指導案を書くのがやさしく”, “授業の予習もでき”, “実習を続ける能力に自信をもてた” ことがわかった。このことは, 1週間の観察実習生活にかなり適応していることを示している。

表3 実習への適応項目の時期別平均得点

項目	実習前	実習後
研究や学習は楽しい	3.91(0.79)	4.43(0.71)
先生に話しかけれない	2.76(1.01)	2.35(0.91)
先生と呼ばれる抵抗感	2.48(1.01)	2.09(0.90)
他の実習生とのつきあい	1.83(0.81)	1.62(0.77)
子供と付き合いたくない	1.30(0.55)	1.23(0.50)
指導案作りが難しい	4.20(0.76)	3.70(0.88)
授業の予習ができない	3.13(0.89)	2.87(0.74)
時間感覚に戸惑う	2.87(1.12)	2.76(1.20)
能力に自信無し	2.95(0.91)	2.51(0.80)

\* ( )内の数値はSDを表す。

(2) 教職に対する態度：2つの項目それぞれについて, 時期ごとの平均得点を示したものが表4である。この表4を基に, 各項目ごとに時期による差を検定した結果, “教職に適性がある” という項目で有意な差がみられた (t(85)=3.99, p<.01)。実習前より後の方が得点が高く, より適性があると感じるようになっている。これらの結果から, 1週間の教育実習に適応していると自己評価するとともに, 自己の教員適性も高いと判断されるようになったことがわかる。

表4 教職態度項目の時期別平均得点

項目	実習前	実習後
教師になりたい	4.22(0.92)	4.33(0.83)
教職に適性がある	3.10(0.81)	3.37(0.76)

\* ( )内の数値はSDを表す。

(3) 教授技能：5因子それぞれについて, 時期ごとの平均得点を示したものが表5である。この表5を基に, 各因子ごとに時期による差を検定した。その結果, “教材・授業研究に必要な技能 (t(85)=5.04, p<.01)”, “課外活動運営の技能 (t(85)=5.24, p<.01)”及び“学校組織運営の技能 (t(85)=2.58, p<.05)”の3つの因子で有意な差がみられた。表5からわかるように, 観察実習だけでは修得が困難と思われる“教材・授業研究に必要な技能”, “課外活動運営の技能”及び“学校組織運営の技能”は, 実習前よりも実習後の方が得点が低く, 期待したほど修得されていないことが明らかになった。これに対し, “説明の技能”と“教育・心理の基礎知識”ではこのような差はみられず, ほぼ期待通りに修得できたと認知されている。この結果は, 教育実習に対する適応及び教員適性の自己評価の結果とは異なり, 1週間の観察実習では十分教授技能が修得できなかったことを示している。観察だけでは修得しにくい技能が修得されていないという点では, これらの技能因子の妥当性を支持するものと考えられる。

表5 教授技能因子の時期別平均得点

項目	実習前	実習後
教材・授業研究の技能	3.11(0.66)	2.64(0.86)
説明の技能	3.73(0.64)	3.85(0.72)
課外活動運営の技能	2.78(0.67)	2.28(0.78)
教育・心理の基礎知識	2.93(0.61)	3.06(0.77)
学校組織運営の技能	3.55(0.56)	3.33(0.72)

\* ( )内の数値はSDを表す。

(4) 教員適性：4因子それぞれについて, 時期ごとの平均得点を示したものが表6である。この表6を基に, 各因子ごとに時期による差の検定を行なったが, どの因子にも有意な差はみられなかった。これは, 教員適性の自己評価とは一致しない結果であった。しかし, 教育実習に対する適応及び教員適性自己評価の結果と教授技能の修得度の結果が異なり, 自己評価が不安定な時期である可能性を考慮すれば, 本研究で扱った1週間という実習期間が短いために変化がみられなかったと考えられよう。この点に関しては, 今後自己評価基

準の変化との関連も考慮しながら、より長期的な教育実習の効果を検討していく必要がある。

表6 教員適性因子の時期別平均得点

項 目	実習前	実習後
事務処理能力	3.60(0.60)	3.68(0.54)
生徒への配慮	4.44(0.44)	4.41(0.39)
教育への熱意	4.23(0.43)	4.22(0.48)
実践的指導力	4.39(0.42)	4.35(0.40)

\* ( )内の数値はSDを表す。

## 引用文献

- 愛知教育大学教育方法改善研究グループ 教員養成大学における教員適性の発見と実践的指導力の喚起に関する研究. 昭和62年度大学教育方法等改善経費(教員養成関係分)による報告書, 1988.
- 生田考至 学生の教授スキルに関する学年間の比較. 日本教育工学雑誌, 1987, 11, 71-87.
- 生田考至・深沢広明 教育実習生の教授スキル(実践的指導力)形成に関する研究(II). 新潟大学教育学部実践研究指導センター研究紀要, 1986, 5, 1-20.
- 生田考至・深沢広明・榊田久雄・田中利一郎. 教育実習生の教授スキル(実践的指導力)形成に関する研究(I). 新潟大学教育学部実践研究指導センター研究紀要, 1985, 4, 1-50.
- 井上弥・石井眞治 実習生の教育実習に対する適応に関する研究. 広島大学教育実践研究指導センター紀要, 1989, 1, 1-6.
- 倉島敬治 教授スキル修得過程と授業実習回数及び実習期間の関係について 日本教育工学雑誌, 1985, 9, 87-99.
- 松田惺・今榮國晴 中堅教員の教員適性に対する意識. 第2回日米教員養成研究シンポジウム発表資料, 1989.
- 岡屋昭雄・若山皖一郎・湯浅恭正・小松伸一 教員の資質向上と教育実習の研究. 香川大学教育学部香川大学教育実践研究, 1989, 12, 73-94.
- 鈴木眞雄・佐藤勝利・今榮國晴・岩井勇児 教育実習事前指導に関する教師と学生の意識. 愛知教育大学教育実習事前指導研究会編「教育実習事前指導改善に関する研究. 研究報告書」, 1977, 28-51.
- 田畑治 教育体験の形成に関する研究(2): 4年次生と2年(短大)学生との比較. 日本教育心理学会第17回大会発表論文集, 1975, 530-537.